

「それで？ 私は今から河原で逆立ちすればいいんですか？」

「はい。余命が少ないので、今すぐにでも」

着古したTシャツの女はめんどくさいっすね、と溜息を吐いた。机を挟んで、スーツの女は何も言わず、手の中の紙束を捲った。

「白井さん。リストは山積みですよ。確率は生半可な奇行で変わる物ではありません」

「奇行って言わないでもえませんか？ 私だってこんなことしたくはないんですよ」

Tシャツの首元をなぞりながら、白井は溜息を吐いた。青村は首を振って、紙束を机に置いた。紙には

『確定死・三カ月後』と書かれている。

「確定死なんて、初めて聞きましたよ。そんなにある物じゃないでしょ」

「そうですね。例えるなら、交通事故に会うような確率でしょうか。しかしまあ『ラプラス』は間違えませんから。あなたは三カ月後、死にます」

ハアーと大きな溜息を吐いて、白井は首を振った。「何度聞いても、確率で死ぬなんてたまったもんじやないですね。私、今まで、死ぬほど幸運じゃなかったことなんてないんですけど。」

こういうのって、滅茶苦茶幸運な人になるもんじやないんですか。私、不運な方だと思えますよ。この上なく」

「いいえ。運に関する因果律はこの世では採用されていないです。いわゆるギャンブラーの誤謬ですね」

「そんなばつさり言わなくてもいいじゃないですか、青村さん」

白井は上目遣いで目の前の女を見た。目の前の女、青村は眉を少し動かして、白井を見た。

「しかし最高の計算機である『ラプラス』の計算に狂いはありません。あなたが狂わなければ、確定的な死が訪れます」

白井はめんどくさそうに頬杖をつく。

「ちなみにこのまま何も行動せずいたら、私はどうやって死ぬんですか」

興奮を隠しきれない声で白井は聞いた。青村はまた紙を捲った。そこには数行の文字が書かれている。

「長くなりますよ。三カ月後、歩いているあなたの後ろからトラックが走ってきます。タイヤがその石を踏みます。飛び石になって停車中の車に当たります。車のフロントガラスから小さな音が鳴ります」

青村は息を短く吸った。白井が口を開きかける。制するように青村は言葉を続けた。

「近くで工事中の作業員の方が一瞬、そちらに気を取

られます。作業員は手元の工具を落とします。落下したのは鉄製のスパナです。足場板に当たり、跳ねて、仮設の手すりにぶつかります。その振動で、固定の甘かった足場材が僅かにずれます」

白井は顔をしかめた。

「ちよつと待つてください。まだ続くんですか」

「ええ。続きます」

青村は淡々と紙を読み上げた。

「散歩中の犬がそれを見て吠えます。犬はリードを引きます。飼い主は驚いて足を滑らせます。その人があなたにぶつかります」

「私に？」

「はい」

白井は目を細めた。

「それで転ぶとか？」

「いいえ。あなたはよろめくだけです」

「じゃあ死なないじゃないですか」

「その一歩です」

青村は紙を指で軽く叩いた。

「あなたがよろめいた一歩で、歩道の縁石から車道に出ます。そこに先ほどのトラックが来ます。そして轢かれます」

白井はしばらく黙っていた。

「……長いですね」

「ええ」

「でもその道を避ければ死なないんじゃないですか？」

青村は首を振った。

「そうしても、あなたが死ぬということは決定事項です。道を変えた程度では、通り魔に会う、例えば隕石が降ってくる、などであなたは死にます」

白井はにやにや笑いながら、体を背もたれに預けた。ギシッと椅子が鳴る。

「隕石……。世界は私の死を願ってるんですか？」

「……確率の話です」

フンと鼻を鳴らし、白井は腕を組む。

「で、確定した死を避けるために、奇行をしろと」

青村はじつと白井を見た。

「そうです。ラプラスの確率計算により、あなたの死は三か月後に確定してしまいました。その確率を狂わすために、あなたが狂ってください。死にたくないなら、ですが」

「いや、拒否したところで、しろって言うでしょ？」

青村は軽く顎を引いた。

「了承してもらうことが二点あります。」

一つ、奇行をしても確定死が無くなるわけでは無いこと。二つ、あなたの行動で誰かが死ぬかもしれないし、地球が滅びるかもしれません」

そんなことは滅多にないんですけどね、と青村は続ける。白井の眉頭には深い皺が刻まれた。

「は？ 私ってそんな世界の命運を左右する人間なんですか？」

「そういうわけでは無いです」

「ああ、そうですか……」

「あくまで確率の話です。バタフライ効果、という言葉葉をご存知ですか？」

「言葉だけは」

「通俗的な意味としては、ほんの些細な出来事が大きな結果の変化をもたらすという意味です。あなたが死なないことは、世界から見ればほんの些細な違いですが、あなたが死なない事で、人類が絶滅するかもしれません」

アハハ、と白井が体を折って笑った。涙を拭きながら、白井は青村を見た。

「ちなみに、私のせいで誰かが死ぬ確率はどれくらいなんですか」

青村は立ち上がり、部屋の壁に向かって歩く。壁に手を触れると、音もなく壁に穴が開き、パソコンが出現した。

「わ、ハイテクだ」

白井の歓声を無視し、青村はキーボードを打った。暫くして、青村は振り返る。

「結果が出ました。白井さんのせいで誰かが死ぬ確率は十のマイナス五十乗です」

白井は首をかしげる。

「つまりは？」

青村はまたキーボードを打つ。

「宝くじの一等を六回連続で当てるくらいの確率です」

「あーあ、誰も死なないじゃないですか」

「その可能性の方がとても高いです」

「必要のない脅しではないですか？」

「了承を取る必要があるのです」

白井は肩を竦めた。コホンとから空咳をして、青村は席に戻った。

「というわけで、あなたにはこのリストに載っていることを行ってもらいます」

青村は白井の目の前に、紙束を置いた。

「何個あるんですか」

「とりあえず、百個。確定死が変わらなければ、もう百個」

白井が一枚、紙を捲る。リストの中盤に書いてある項目を読み上げた。

「駅で知らない人に『メダル取ったことありますか』と聞く」

白井は紙を持ったまま固まった。

「本気ですか？」

「はい」

「記者じゃないんですよ、私」

「充分、存じていますよ。だからこそ、確率を覆しうる奇行になるんですよ」

青村は淡々と告げる。

「重要なのは結果ではなく、行動です。あなたの通常の行動から外れること。それによって確立の分岐が増えます」

白井は紙束をばらばらとめくる。

「えっと……」

眉が段々と寄っていく。

「・知らない駅で降りて歩く。

・夜中の三時に川辺で歌う。

・誰かを抱きしめる」

白井は紙を机に置いた。

「青村さん」

「はい」

「これ、奇行じゃなくて変人リストですよね」

「私もそう思います。何も知らない人から見れば、完全に変質者です。」

ああ、安心してください。確定死回避のために行動していると言えば逮捕は免れます。犯罪はしてませんから」

白井は祈るように机に肘をついた。

「連行はされるんですよ」

「運が悪ければ、されますね。された方を何人か知っています」

「もっと家の中でやれることはないんですか？」

青村は白井の言葉で逡巡した。

「ありますよ。確か七十八個目に『手を握る』という項目があったと思います。白井さんは人との触れ合いが極端に少ないようなので、それが奇行にカウントされるんですよ」

「一言余計ですよ。否定はしません」

白井はリストに目を向けた。紙束の最後まで目を通し、白井は静かに机の上に戻した。

「これをするんですか」

「はい」

青村は即答した。

「死ぬのを回避するんですから。これくらいはしないといけません」

事も無げに言う青村を見て、白井は思い切り顔を顰めてやった。青村はパラパラと紙を捲り、時折、ペンでメモしていた。

白井は、机の上に置かれたリストの七十八番という文字を指先でなぞった。

「……ねえ、青村さん」

「何でしょうか。早く着替えて河原へ向かってください。逆立ちの予定が詰まっています」

ちらりと白井に目を向けた。眼光は鋭い。

「その前に、これ消化しちゃダメですか？ 外で奇行に走る前に」

白井がリストの七十八番目をトントンと叩く。青村は僅かに細めた。

『手を握る』ですか。今、ここで、私と、ということですか？」

「他に誰がいるんですか。この紙束でも握りこみます？」

白井は怠惰な態度を隠そうともせず、右手を差し出した。Tシャツの袖から伸びた腕は、どこか頼りなげだった。青村は数秒、その手と白井の顔を交互に見比べ、小さく溜息をついた。

「仕方がありませんね」

青村が席を立ち、ゆっくりと手を伸ばす。その指先は驚くほど白く、そして冷たかった。ギュツ、と白井がその手を握りしめる。

「冷たい。確定死してるの、そっちじゃないです？」

「失礼な。低血圧なだけです。それより、白井さん、力が強すぎます」

「あ、すみません」

白井は苦笑いして力を抜いたが、手は離さなかつ

た。白井の体温が青村に流れていく。白井が僅かに口角を上げた。

「どうですか。私の確定死、回避できそうですか」

白井は繋いだ手を軽く揺らしながら、上目遣いで尋ねた。青村は視線を二人の手の結合部に落とした。

「分かりません。しかし、白井さんの心拍数が上昇していますね。これだけで、明日の朝食に選ぶパンの種類が変わる程度の変数は生じているんじゃないでしょうか」

「それ、私の死と関係あるんですか？」

青村は繋いでない方の手を顎に当てた。

「そうですね。クロワッサンを選ぶか食パンを選ぶか迷うことで、家を出る時間が三秒変わります。それで、三ヶ月後のトラックは石を踏まないかもしれないかもしれません」

ふうーん、と白井は口を尖らせた。パツと手を離し、自分の顔を両手で覆った。死を宣告された女と、それを事務的に管理する女。繋がれた体温が消えた後の指先は、妙に熱を持っていた。

白井は机のペンで七十八番目に上から線を引いた。

「馬鹿みたい。手を握るだけで世界が変わるとか、壮大な嫌がらせ受けてる気分ですよ」

「運命なんてそんなもの、と割り切るしかないですよ。さあ、次はリストの一番目、『河原で逆立ちをす

る』を実行しましょう。近くの河原まで同行します」
「ついてくるんですか？」

「記録が必要です。恥ずかしがって逆立ちでなく、ランニングをしたら、それは『奇行』ではなく『ただのダイエッター』として処理され、因果律に無視されま
すから。きっちり逆立ちをしてください」

「信じてくれないんですか」

「そういう決まりです」

白井は諦めたように立ち上がって、ドアへと歩く。
青村もバッグに書類を詰め込み、後ろについていく。

「運動できる服を取りに行きますか？」

「いや、このままでも大丈夫です」

白井が確かめるように、腕を大きく回した。Tシャツの袖口から白い腕が見えた。太陽を忘れた不健康な腕に見えた。

事務所から近くの川までの道のりは、歩いて十分ほどだった。

先を歩く青村の背中へ、まるで定規で線を引いたように真っ直ぐで、ビジネスバッグを揺らすリズムすら一定だった。白井はその後ろを、重い足取りでついていく。

「……ねえ、青村さん」

「何でしょうか」

「奇行リストは『ラプラス』が作ったんですか？」

白井の問いに、青村は足を止めずに答えた。

「いいえ。私が作りました」

「青村さんが？」

白井は驚いて歩みを止める。青村も数歩歩いて歩みを止め振り返った。

「ええ。ラプラスは巨大な計算機、コンピュータです。演繹的に何かを導き出すのが得意で、アブダクション的な推論は不得意なんです。まだ推論の面で、私たち人間は」

「なるほど……。もう少し簡単に言うとうと？」

青村は顎に手を当てた。

「ラプラスにはできない事なので、私が行いました」

白井は何度か頷き、肩を回した。

「ラプラスは最強のコンピュータで、何でもわかるもんだと思ってました」

「今までの全事象から未来を演繹してるにすぎません。つまりは日常の積み重ねから未来に起こることを予測することが得意なんです。そしてイレギュラーに弱い。つまり非論理的なことを思いつけないんですよ」

青村は再び前を向き、何事もなかったかのように歩き出した。舗装されたアスファルトの上を、彼女のヒールが規則正しい音を立てて叩く。白井はその背中を

追いながら、どこか狐につままれたような心地だった。

「非論理的って。自覚あるんですね、あのリスト」

「もちろん。非論理的なほど良いんですよ。あなたの行動ログからは想像もできないほど、死が遠くなりません」

商店街の入り口を通りかかると、夕食の買い出しに出る主婦や、談笑しながら歩く部活帰りの高校生たちが二人を追い越していった。平和で、退屈で、どこまでも均一な日常。その中心を、これから河原で逆立ちをしようとする二十代の女と、ストップウォッチを首にかけてスーツ姿の女が、異物のように通り過ぎていく。

白井はふと、路地裏のゴミ捨て場を漁るカラスと目が合った。ぎらついた黒い瞳に見つめられ、背筋に冷たいものが走る。

「ねえ、青村さん。青村さんは怖くないんですか？」

「何が、でしょうか。逆立ちがですか？」

「そうじゃなくて。それもありますけど。私の変な行動のせいで、マイナス五十乗だか何だか知らないけど、誰かが死ぬかもしれないでしょ？ 私が勝手にドミノを倒して、世界の調和を狂わすわけで」

青村は足を止め、夕陽に細められた瞳で白井をじっ

と見つめた。西日が彼女の顔に影を差し、その表情を読み取らせない。

「因果律を恐れていたら、私たちは瞬きすらできません。あなたが今吐き出した二酸化炭素のせいで、数千キロ先の火災の燃焼効率が変わる可能性だってあるんですから」

「……はあ」

「世界は残酷なまでに緻密ですが、同時に適当でもあります。

生命は等しく有価値であり無価値です。誰が生きようと誰が死のうと世界という膨大なシステムからすれば、呼吸にも等しい」

「つまり、何言ってるんですか」

白井はため息交じりに聞いた。

「あなたは今、死ぬべきではないので、つまらないことは気にするな、と言いました」

初めからそう言うてください、と白井は笑った。

前方に、燃えるような朱色に染まった河川敷が見えてきた。川面はキラキラと光を跳ね返し、風が白井のTシャツを激しくはためかせる。

「……着いてしまった」

白井が頭に手を当て、しゃがみ込む。

「はい。絶好の逆立ち日和です。通行人も十分に多

い。奇行としては最適な状況です」

青村はバッグから業務用のような無骨なストップウオッチを取り出し、カチリと親指で感触を確かめた。その無機質な音が、静かな河原に妙に響く。

「最後に一つだけ聞いていいですか」

「何でしょうか」

「青村さん、もし私が逆立ちに失敗して首の骨を折って死んだら、それも『確定死』の一部なんですか？」

青村は初めて、ほんの僅かに口角を上げたように見えた。それは冷笑のようでもあり、あるいは喜びを知ったアンドロイドのようでもあった。

「死の可能性は確定死に関わらず、常に人間にまわりついてます。あなたも私も、今ここで死ぬかもしれない」

「奇行の意味は無いんですか！」

白井は叫ぶと、やけくそ気味に芝生の斜面へと駆け出していった。その後ろ姿を、青村はTシャツのはためきを見つめながら、ストップウオッチの動作確認をした。

「いつでもいいですよ」

ストップウオッチがゼロを指していることを確認する。白井が両手を構えた。

「いきます」

音もなく、ゆったりと、白井が逆立ちをした。青村はストップウオッチをスタートさせた。両足を曲げて、バランスを取っている。それは濁流に流されかける柱のようだった。

ふと、青村は生化学の授業を思い出した。人は時の流れに、僅かにでも逆らおうとする小さな柱に過ぎない。それでも、生きようとするのは、きつと生命が尊いからだ、そう先生は言っていた。彼女の胸で十字架が光っていたのを思い出す。彼女は敬虔なクリスチャンだった。困ったときにはいつも十字を切っていた。

ドシャ、と白井が地面に倒れた。

「四十二秒」

「減っちゃったか」

白井は汗だくで河原に寝転がっている。

「冷えますよ」

青村は白井に声をかけた。白井はそれを鼻で笑った。

「青村さん、知ってるでしょ。私は筋肉量が多い部類です。そう簡単に冷えませんよ」

はは、と乾いた笑いが白井の口から漏れ出る。背中に感じる丸石の感触が心地いい。

白井は自分の手を見つめた。手には丸い跡がついている。床なら、こんなことは起きないのと思った。

平らな床では跡がつくわけない。上体を勢いで上げ、座り直す。腹筋に若干の違和感があった。『倒立に一番必要なのは、腹筋!』と昔、コーチに言われたのを思い出した。体幹の筋肉が落ちているようだ。競技を止めて何年も経つのに、頭が勝手に体の分析をした。

「……何してるんですか、青村さん」

白井は自分の掌から視線を上げ、傍らに立つ青村を見上げた。青村は手を広げ、今にも倒立しようとしている。

「倒立してみようかと」

「ご経験は？」

「まったく」

勢いをつけて白井は立ち上がった。青村に詰め寄り、両手を掴む。

「馬鹿なんですか？ 怪我しますよ。それも、こんな

何の設備の無い場所で。骨折します」

「あなたはしませんでしたよ」

白井は、拳を握り込んだ。

「私は、経験者でした。この世界でも有数の。あなたも知ってるでしょ」

白井の声は、風に乗って淡々と響いた。

「ええ」

青村は軽く頷く。白井は、無造作に青村の手を放った。その手でTシャツの裾についた土を無造作に払

う。

「なら、私の前で床の技をしようとしないうで。それが無謀であればあるほど、苛立ちます」

青村は、ストップウォッチをバッグにしまい、西日に目を細めた。

「心配してくれてるんですか。それとも素人と馬鹿にしているんですか」

青村の言葉に、白井は鼻を鳴らした。少しだけ、腹の奥が熱い。

「もちろん馬鹿にしているんですよ。さ、行きましよう。次は何でしたっけ。知らない駅で降りる、でしたっけ」

「はい。まだ時間があります。あなたならきつと、駅までは少々離れていますが、あなたならすぐ着くでしょう？」

「……今の私は、階段を上るだけで息が切れる『一般人』なんです。手加減してください」

青村はふふ、と笑った。それは他人の子供に向けるような笑いだった。

電車は、夕闇に沈みかけた郊外の街を切り裂く。車内は帰宅ラッシュの余韻で薄暗く、吊り革がメトロノームのように一定のリズムで揺れていた。白井は窓に頭を預け、流れていく街灯の光を目で追っていた。青

村は姿勢を崩さず、目の少し先で流れる家々を眺めていた。

「で、どこで降りるんですか」

「直感です」

隣に座る青村は、目線を変えずに言った。

「ラプラスの予測モデルにおいて、あなたの移動履歴は極めて安定的でした。職場と自宅、たまに寄るスーパーと本屋。その四角形の外に出るだけで、計算式にエラーが出始めます」

「今は休職してるので、家の一点にしかいませんけど。というか、そんなとこまで把握してるんですか。

ストーカーより性質が悪い」

「……職務として与えられた権限を行使しているにすぎません。法の範囲内ですので訴訟は止めた方が良いでしょう」

白井はわざとらしい溜息を吐いた。

「なら、次の駅で降ります。この路線自体乗ったことがないから、どこで降りてもいいですよね」

「はい。未踏の駅ならどこでも」

白井は足を揺らした。鉄棒でずっと回っていたことを思い出す。頭に血が行かなくなつて、何も考えられなくなる。昔はそれが生活の中で唯一の救いだった。

電車が速度を落とし、古びたホームに滑り込む。何

度かブレーキの排気音がして、電車が止まる。白井がボタンを押してドアを開けた。看板には『石山駅』と書かれていた。

「青村さんはここに来たことあります？」

「無いです」

降り立った駅は、街灯が虫の羽音のような音を立てて明滅する、無人駅だった。改札を出ると、そこにはコンビニすらなく、ただ森のような公園と、古い住宅街が広がっている。

「ここ、どこですか」

「石山駅です」

「私はそれが聞きたいと思ったんですね？」

「冗談です。さて、少し散策しましょうか。ちなみに、今日はこれ以上の電子デバイスの使用は互いに禁止です」

白井は絶望的な顔で、誰もいない駅前広場を見た。

「青村さん、ここ、知らない場所ですよ。帰り道はどうやって知るんですか」

「さあ。確定死の回避のためです。散策は気の赴くままに三時間以上行わなければいけません。行きましょう」

「なんでそんな楽しそうなんですか」

白井は大きく溜息を吐くと、Tシャツの裾をズボンに押し込み、滑らかに歩き出した。青村はその隣を歩

く。

白井をちらりと見た。彼女の姿勢は不自然なほどまっすぐだ。まっすぐに矯正されていると言ってもいい。確か一時期バレエをしていたことを思い出した。手首、足首はほっそりとしていて、ドールのようだ。二人は薄暗い夜道を歩き始めた。街灯の間隔は広く、白井が足元の石ころを蹴るたびに、乾いた音が夜の静寂を乱した。

「青村さん」

白井は自分のＴシャツが乾ききったのを感じた。

「青村さんは何でこの仕事をやってるんですか」

青村は足を止めず、真っ直ぐ前を見つめたまま答えた。

「どういう意図の話ですか」

「暇つぶしですよ。歩き始めて、まだ一時間も経ってないでしょ？　ここから二時間無言はきついです」

青村の歩幅が、わずかに乱れた。おもむろに立ち止まる。ぼうっと、古い民家の生垣越しに揺れる紫陽花の影を見つめた。

「仕事と言うのは具体的に何を指してるんですか？」

「えっと、ほら最初にくれた名刺に書いてあったやつですよ。ラプラス代理人、でしたっけ？」

「ラプラス代執行人ですね。ラプラスの確率計算で生じた思わしくない結果に対して、それを修正できるよ

うにどうにかする職業です」

白井がハハ、と笑った。

「どうにかって、どうするんですか」

青村はらしくもなく、言葉に詰まった。単語を探するように、視線をさまよわせた。

「そうですね。今回のように行動リストを作ったり、結果を受け入れる手伝いをしたり、しかるべき機関に対象者を繋げたりですね」

「確定死を受け入れることって、出来るんですか？」

白井は弾かれたように青村を見た。青村はゆっくりと頷いた。

「ええ。おすすめはしませんが」

青村はふーんと相槌を打った。

「で、青村さんはどうしてラプラスなんとかになったんですか？」

青村は軽く息を吐いた。

「ラプラス代執行人です。そうですね。一言でいうなら、私が確率に狂わされたから、でしょうか」

「へえ。詳しく」

白井は肩を揺らした。少し長くなります、と前置きをして青村は話し始めた。

「私が子供の頃、大規模な列車脱線事故がありました。後から知ったんですが、ラプラスの計算では、生存者はゼロ。その車両に乗っていた全員が、死の因果

に囚われていました。

私はその列車に母と父と乗っていました。家族旅行の途中だったんです。ちょうど、目的地まであと四駅とアナウンスが聞こえたときでした。ゴンという音と衝撃の後、大きなブレーキ音がして、体全身が宙に浮きました。そして気がついたら病院です」

白井の息を呑む音が響いた。

「父と母は、いえ、同じ車両に乗っていた私を除いた全員が死にました。私だけ生き残ったんです。確率通りに行けば死ぬはずの私が、です。なぜか分かりますか？」

白井は力なく首を振った。

「私たちと同じような奇行を行う人がいたんです。それでラプラスの計算が狂ったんです。この人は列車の中で子供用ピアノを弾くという奇行を行いました。ちなみに、この奇行を行ったのは、あなたのような確定死に囚われた人ではありません。誰がこれを行ったと思いますか？」

白井はまた首を振った。

「私と同じ、ラプラス代執行人です。列車事故の結果を揺らがせるために彼は奇行を行いました。」

事故を回避すると、二年後に大きなテロが起きたんです。列車事故で死ぬ七十一人とテロで死ぬ三千人を天秤にかけて後者が選ばれたんです。

けれど、ラプラス代執行人の一人が、七十一人も救いたい、と思い列車の中で子供用ピアノを弾いたんです。そしてラプラスの計算が狂い、私が生き残った。しかしまあ、『私だけ』と言った通り、奇行を行った代執行人は死にました。私の代わりのように。

非論理的でしょう？ 私一人を救う代わりに死ななくてもいい一人が死んだんです。

結局、ラプラスの計算通り七十一人死んだ。どこまでもアイツの。ラプラスの思い通りなんです。

私はそんな悪魔に一泡吹かせたくてこの職業に就きました」

青村はゆつくりと白井の顔を見た。一気に話したせいか、青村の頬はわずかに赤味を帯びていた。青村はゆつくりと視線を外し、空を見上げた。

「重い話だったでしょう。忘れてください」

「嫌です」

白井は目を見開いた。思っていたより、強く言葉が出た。

「覚えておきます」

言い切って白井は歩き出した。青村は薄く笑みを浮かべた。

二人は歩き果てた先の小さな公園のベンチに腰を下ろした。

「かなり歩きましたけど」

「四時間弱、歩いてます」

白井がホッと息を吐いた。そのまま体を伸ばす。そのしなやかさに、青村は若干見惚れた。

「良かった。二時間とか言われたら、私、ガチ泣きしてました」

白井はへらへらと笑った。

「それは見てみたいですね」

「青村さん、何言っても無表情だから、冗談かそうじやないかの区別がつきませんね」

「そういうの、得意じゃないんですよね。笑うという行為には嘲りが含まれますから。人には真剣に謙虚に向き合うべきですから」

白井が軽やかに笑った。

「考えすぎですね。青村さんが心の中で嘲っていないのなら、笑いは真剣に向き合っている証拠でしょ」

「無意識下ではわかりません。子供を可愛いと思う心にはきつと、子供は自分より劣っているという心があります。笑いなんてそんなもんです。私はずっと真顔でいることが誰かを愛しているという態度だと思います」

めんどくさ、と白井が舌を出した。青村は鼻を鳴らした。そう言われるのは慣れていた。

「笑うという行為はあまりに加害性に富みすぎていま

す。私は誰も傷つけたくないんです」

「なんでそんなに頑固なんですか」

ハハ、と白井は笑った。

「……善く生きる、は良いことですから」

白井は、自分の隣で鉄の彫刻のように座る青村をまじまじと見つめた。

「あんな変質者一步手前のリストを押し付けておいて、よく言えますね」

青村は視線を動かさず、夜の闇に沈むブランコを眺めていた。

「あれは、あなたが死ぬことを阻止するための必要悪です。あなたの命とリストを天秤にかけると、あなたの命の方が重かった。

でもまあ、あなたの自己決定権を侵害していますかもしれない。生きることを強要していると言い換えでもいい。それは、ある意味では最大の加害かもしれません」

「そんなことないですよ」

白井は苦笑して、ベンチの背もたれに深く体を預けた。夜空には、都会の端らしい中途半端な数の星が浮いている。

「ねえ、青村さん。青村さんは、自分が助かった理由が代執行人だったって知ったとき、どう思ったんですか？ 答えたくなかったら、いいんですけど」

青村の指先が、膝の上でかすかに動いた。

「……さあ、どうだったでしょうか。昔のことなので。でも、憎んでいたことは確かですね。私自身を。

ラプラス代執行人になるために、何が必要かご存知ですか。他人のケアの仕方、法知識、それに伴う判例の知識、政府による制度、その他さまざまなことを覚えなければいけません」

青村の声は、遠くの海鳴りのように低く響いた。

「ラプラス代執行人になろうと近づくたび、私は自分のせいで踏みにじってしまった人の偉大さに気づくんです。私のような小娘一人を助けるために踏みにじつていもいい命ではなかった。彼はきっと、良い執行人でした」

青村の声は白井の腹を震わせた。白井は軽い吐き気を覚えた。胸の真ん中で空気がつかえて、呼吸が出来なかった。

「私は常に生きる価値を示し続けなければならないんです。私以外は生まれ落ちた瞬間から、生きるに値する人々たちの集合です。しかし、私は一度死んでいます。生かされた私は生きる価値を証明しなければいけない。

そんなところでしょいか。私にとって代執行人に助けられたのは、生きるための縛りです。これがなければ、すぐにでも、そのブランコに縄でも括りつけて死

んでました。私はそれほど、強い人間ではないので」
ふらりとブランコを指さした。風で少し揺らめいているそれは、手招きしているようでもあった。

白井は、隣に座るこの不器用な代執行人の横顔を見た。青村が笑わないのは、冷徹だからではない。あまりに真面目に、世界と、そして目の前の私という個体と向き合おうとしているからなのだと、ようやく理解した。

「じゃ、私は白井さんが生きるための価値証明ってわけですか」

白井は立ち上がり、軽く屈伸をした。

「そうではな……そうかもしれません。私はあなたを私利私欲のために利用しているのかもしれない。駄目ですよ、こんなの」

「さあ、知らないですよ。駄目かどうかなんて私が決めることじゃないでしょ。それは、青村さんが決めるもので、青村さんのものです」

青村は白井をじっと見た。

白井はそれから逃げるように、数歩後ろに下がった。そのまま助走も無しに、青村の目の前でバク宙をした。

「ハッ、ハッ、意外と、出来るもんだ」

軽く息を切らして、白井は青村に笑いかけた。

「どうでした。うまいもんでしょう」

青村は熱に浮かされたように頷いた。

それはまるで、木の葉が風で舞うような音もしないバク宙だった。

「バク宙ってこんな綺麗、なんですね」

「後方宙返り、ですよ。ちなみに、今の宙返りじゃ、減点です。空中で膝が若干開いていました。着地も少し、前傾姿勢になりました」

気が付くと、青村の口は開いていた。

「知りませんでした。私には、あまりに綺麗に見えたので」

「体操の床競技では女性は美しさに重きが置かれま

す。ダンスとかもするんですよ。笑えますよね」
疲れた一と、とぼやきながら、白井はベンチに座り直した。

「あなたの競技映像を拝見しましたが、ダンス含め美しいと思いましたよ。やはり直接見た方が、綺麗でした」

「いつのを、見たんです？」

青村は一瞬、顔を固めた。

「全日本選手権のものを」

白井は鼻を鳴らした。

「あなたは性格が悪いんですね。私の人生最大に汚れた部分を見た」

青村は首を振る。その後どう答えればいいか分から

なかった。

「なら、見ましたか。私の頭から血がだらだらと流れたのを」

頷く。青村は見た。床が赤く染まるのを。白井の空色の衣装が赤く染まった。スパンコールの輝きが徐々に失われ、白い肌を赤い血が伝っていた。

「体操って、意外と繊細なんです。ほんの一ミリ、重心がズレただけで、さっきまでの『美しい演技』は『凄惨な事故』に化ける。あの時、床に叩きつけられた瞬間、私が何を思ったか分かりますか？」

白井は、自分の掌をじっと見つめた。河原でついた丸石の跡はもう消えている。

「やっと終わった、って。血が流れて、意識が遠く中で、私は安心したんです。もう笑わなくていい。美しくあろうとしなくていい。ここでおしまいでした。体操選手、白井風は死にました」

白井は、握りしめた拳を震わせた。伏せた目の先はどこか遠くを見つめていた。

「でも、世界は私を完結させてくれなかった。事故の後、リハビリを経て社会に戻された私を待っていたのは、天才少女という名の、剥製にされるような毎日だった。

青村さん、分かりますか？ コンビニのバイトでレジを打った時に、客が私の顔を見て『あの時の』って

顔をするんです。街を歩けば、かつてのライバルがテレビの中で華やかに笑っている。私はただ生きて、食べて、排泄して、ゴミを出す。その繰り返しの、どこに私の価値があるんですか？」

白井は、力なく笑った。その笑いには、自分自身を徹底的に見下すような響きがあった。

「一番辛かったのは、誰からも恨まれなかったこと。みんな優しくかった。コーチも、両親も、『生きていてくれてよかった』って言いました。でも、その言葉の裏側には、常に『もう何も期待していない』という宣告が張り付いていた。」

私は、ずっと、何かを成し遂げる側の人間でした。人類の最先端にいる側の人間だと思っていた。でも、事故でメッキが剥がれた後に残ったのは、何の取り柄もない、ただの使い古された雑巾のような人間でした。私が死んでも、世界は一ミリも困らない。むしろ、みんな『ようやく終わったんだな』って、心の底で安堵するはずなんです。私の命は、もうずっと前から、誰から必要とされていないゴミだった」

白井は座り直した。青村に少し近寄る。その瞳には、暗い絶望が、ヘドロのように沈殿している。

「期待されることが苦痛だったのに、期待されなくなったらそれはそれで苦痛だった。」

三ヶ月後に死ぬって言われたとき、私は少し喜びま

した。ようやく、この無価値な時間から解放されるんだって」

白井の声は、泣きそうにも、何も感じていないようにも聞こえた。

「たぶん、死にたいんじゃないんです。私は、もうとつくに死んでるんです。ただ、心臓を止めるための免許符が欲しかっただけ。なのに、あなたはそれを破り捨てた。これ以上に、残酷なことがありますか？」

青村の無表情な顔が、一瞬だけ、泣きそうに見える。白井は嘲るような笑みを青村に浮かべた。

「青村さん、あなたは幸運です。あなたは『生きる意味を証明しなければ言えません』と言いました。それがちゃんと生きる意味になっているんですね。あなたには大義があります。」

私には無いんです。もう、疲れました。顔を見て

『あ、白井風ちゃんだ』と言われるのにも、SNSで開脚した瞬間の写真を送られ続けるのも。私は『体操選手の白井風』の罪だけ背負わされたまま、名誉にはもう辿り着けないんです」

ふっ、と白井が息を吐く音が聞こえた。青村は唇を噛んだ。

嬉しさと悔しさが入り交じっていた。やっと、白井の声を聴くことが出来た。最近の彼女は抑うつ傾向が強く、ここ一ヶ月、処方される中で最も強い睡眠薬を

常用していた。

原因は分かっている。彼女のSNSが炎上したのだ。彼女はただ、『選手時代の写真を送ってくるのは止めて』と言っただけであつた。たしか、誰かが生意気だ、と言ったのだ。そして彼女には大量のポルノに似た写真が送られた。

「……無価値、ですか」

青村の声は、夜の冷気に触れて氷のように硬かつた。白井の濁った瞳を、青村は正面から見据えた。

「白井さん。あなたは一つ、大きな勘違いをしています。ラプラスの計算において、生命の価値とは『何をしたか』や『誰に必要とされているか』で決まるものではありません」

青村はバッグから、奇行リストの束を取り出した。「このリストにある奇行に意味があるのは、それがあなたの『意志』による逸脱だからです。

世界という巨大な演算装置にとって、あなたが元天才少女であろうと、コンビニの店員であろうと、事務員であろうと、その質量に差はありません。あなたの内に含まれる、原子数や種類にそう大きな差はないでしょう。

しかし、砂にまみれて逆立ちをした。その瞬間に生じた因果の揺らぎは、銀河一つが誕生する確率も秘めた行為なのです」

青村は一步、白井に歩み寄つた。二人の距離が、手を握つた時よりも近く感じられる。

「あなたが自分の命を雑巾だと呼ぶなら、私はそれを丁寧に洗う代執行人です。誰からも期待されることも、されないことも、そんなに恐ろしいですか？　だつたら、私が期待します。三ヶ月後のあなたが、トラックに轢かれず、どこかでまた、減点だらけの無様なバク宙を披露することを」

白井は呆氣に取られたように口を開けた。青村の無表情な顔は変わらない。だが、その瞳だけが、夜の闇を射抜くような光を宿していた。

「は？」

「やっと、分かりました。あなたには生きる意味が必要だつたんですね。とりあえず、このリストを消化すること、私の生きる意味になること。このあたりでどうでしょうか。あなたの生きる意味にはならないでしょうか」

白井は毒気を抜かれたように、ふっと肩の力を抜いた。ふらりと立ち上がる。青村も合わせて立つ。白井は青村をまじまじと見つめて、溜息を吐いた。

「青村さんって、可愛いって言われたことないでしょ」

そう言いながらも、白井の足取りは先ほどよりも少しだけ軽かつた。

「昔から、結構、可愛いって言葉が嫌いなんですよね。なんだか、恋愛を人生の主軸としているみたいで」

「つまり言われたことがないത്？」

「はい、まあ。逆はありますよ」

二人が自販機の明かりに向かって歩き出すと、流れ星が一瞬、光った。

三カ月と一日が過ぎた。世界は滅びず、隕石は降らず、白井の体にはトラウマのタイヤ痕も、通り魔に刺された傷も刻まれていない。

事務所の机の上には、ボロボロになった紙束が置かれている。一〇〇個すべての項目に、無造作な、けれど力強い横線が引かれていた。

白井は、以前と同じようなＴシャツ姿で椅子にふんぞり返り、退屈な天井を眺めていた。

「で、私は生きてるんですけど」

青村は、手元の端末から顔を上げ、スーツの襟を正した。その表情は相変わらず鉄板のように動かない。

「見ての通りです。確定死から、あなたの名前は消去されました。おめでとうございます、白井さん。あなたは確率を打ち破った」

「打ち破った、ねえ。なんだか拍子抜けです。あんなに逆立ちさせたり、知らない駅で降ろしたりしたくせ

に」

白井は呆れたように鼻を鳴らした。だが、その顔色は三カ月前とは見違えるほど血色が良く、その瞳には淀んだヘドロの代わりに、微かな好奇心が宿っている。

「参考までにお聞きしたいのですが、リストの中で何が一番、思い出に残っていますか？」

白井は困った顔をする。眉を寄せて、微かに唸った。

「最初だから、手を握ったのはかなり印象深かった。なっちゃんの手が冷たくてびっくりした」

白井はいつの間にか青村のことをなっちゃんと呼ぶようになっていた。青村奈津からなっちゃんなんて、短絡的だ。青村は少しだけ口角を上げた。

「なっちゃんに料理を作ったこともあったね」

「なんでしたっけ、あの赤いスープ」

「ボルシチね。ビーツを手に入れるの苦労したんだけど。いつも行ってるスーパーになかったから、かなり数を巡ったし、店員さんにも聞いたし」

白井は思い出し笑いをした。

「あれはかなりおいしかったですね。リストでは『作ったことない料理を作って、誰かにふるまう』でしたよね。なんで私に作ってくれたんですか」

「だって、なっちゃん、いつも私についてくるから。」

大抵、毎日家にやってきて、リストを消化させようとするじゃん。朝早くに起こすから、かなり、結構、とても嫌だった」

白井は唇を尖らせる。口笛を吹いているようにも見えた。

最初の内は何度チャイムを押しても白井が出てこなかった。青村が着信を五件入れたところで、『煩い』と叫びながら中に入れてくれた。あの時は白井が死んでしまったかと思った。

「他にありますか？」

白井に続きを促しつつ、紙にメモを取る。経過は良好。精神状態も安定。陽性転移からも抜けたようだ。ホッと息を吐いた。これで今回の仕事は終わりだ。

「あとは、駅で『あなたはメダルを取ったことがありますか』と聞くのはツラかったですね

ま、楽しくもあったんですけど。ほら、息子さんから『お仕事頑張ったメダル』をもらったとか、ボクシングの日本チャンピオンがいたのもビックリでしたね。優勝した時の写真があざだらけで、可哀想でしたけど」

白井はスマホで撮った写真を眺めていた。彼女が知らない人と話せるようになったのは、『奇行』を始めて二ヶ月した頃だった。話しかけた相手は全て、こちらが用意したサクラだ。白井の成功体験になったな

ら、と思ったが、これほど喜んでくれるとは思わなかった。

白井はスマホの画面をスワイプしながら、どこか遠い目をした。かつて見つけていたのは、点数が刻まれる電光掲示板や、冷たい審判の視線だけだった。けれど、いま、眺めるのは確かにその場で交わされた誰かの人生の断片だ。

「……ねえ、なっちゃん。私、思うんだけど」

白井がスマホを机に置き、真っ直ぐに青村を見つめた。

「結局、私が確定死になったのって、私が世界を無視してたからなのかな。私が勝手に無価値って決めつけて、周りの景色を全部グレーに塗りつぶしてたから、ラプラスってやつも、コイツもう終わるな、って判断したんじゃない？」

青村は、ペンを動かしていた手を止めた。白井の言葉は正確に的を射ている。青村は短く、息を吐いた。

「もう、いいでしょう。白井さん、最初に、あなたがどうやって死ぬか言ったと思いますが、覚えていますか？」

「なんでしたっけ、トラックが踏んだ石が跳ねて、当たって道に出るんでしたっけ？」

青村は笑みを浮かべて頷いた。

「ええ、あのときは『偶然』『たまたま』あなたが道

路に出てしまい、車に轢かれると言いました」

「そうでしたっけ？」

「はい。けれどあれは嘘です。あなたは、あの日から三カ月後、意思をもって道路に飛び出しました」

白井が小馬鹿にするような顔を浮かべた。信じられないと言いたげだ。青村はそのまま続ける。

「白井さん。三カ月前のあなたの精神状態、覚えていますか。強い睡眠薬の常用、外部からの誹謗中傷、そして何より、あなた自身が自分を『死んでいる』と定義していた。」

ラプラスが算出したのは、外的な事故の確率ではありません。あなたの内側にある『死の確実性』です」

白井が口を開けたまま固まっている。青村は淡々と続ける。

「物理的なトラックが来る必要なんてなかった。あの時のあなたは、放っておけば三カ月後のその日、自らベランダの外へ足を踏み出すか、あるだけの薬を飲み干していたでしょう。」

ラプラスにとって、物理的な衝突も自死も、一人の人間が消失するという結果においては等価です。だから、あれは『確定死』だった」

部屋を沈黙が支配した。白井は、自分の掌を見つめる。かつて丸石の跡がついていた、今は柔らかな皮膚。

「……じゃあ、あの変質者リストは？」

「あなたの脳に、日常とは異なる電気信号を強制的に送り込むための処方箋です。逆立ちをして血を昇らせ、知らない駅で迷い、誰かの手を握る。そうしてあなたの思考の因果律に『ノイズ』を混ぜ続けることで、死に向かって真つ直ぐ伸びていた思考のレールを脱線させたんです。気分はどうですか」

白井はしばらく黙っていたが、やがて、喉の奥から絞り出すように笑った。

「最悪ですよ。ただのカウンセリングにしては、あまりに手が込みすぎて、恥ずかしいじゃないですか。私、最後の夜は、涙を流して、祈りながら、贅沢に高いクロワッサン買ったんですよ」

白井は椅子から立ち上がり、青村のすぐ目の前まで歩み寄った。そして、以前よりもずっと自然な動作で、青村の右手を握った。

青村の手は、相変わらず少し冷たかった。けれど。「は」

青村の頬が、わずかに震えた。

白井の体温が伝わったからではない。白井が、青村の指先を、慈しむように優しく握り返したからだ。

「青村さん。あなた、今、ちよつとドキドキしてるでしょ？」

「……さあ」

「嘘つき。顔、ちよつとだけ赤いですよ」

白井は、悪戯っぽく口角を上げた。背が若干丸まっている。あの夜、歩きながら眺めたまっすぐに矯正された背中ではない。

「一〇一項目め、追加してもいいですか」

「は？ リストは終了しました」

「知ってるよ」

白井は握った手を離さず、一步踏み込んで、青村の耳元で囁いた。

『命を救ってくれた相手と、生存記念にご飯を食べに行く』。これ、かなりの奇行だと思いませんか？」

青村は数秒、計算を放棄したような顔で立ち尽くしていた。だが、やがて諦めたように小さく息を吐くと、その硬い表情を、春の雪解けのような微かな揺らぎに変えた。

「奇行ではないです。珍しい状況だけで」

青村は右の口角だけ上げる、不自然な笑みを浮かべた。それは昔に忘れてしまった、心からの喜びに由来する笑いだった。